

平成 29 年度厚生労働科学研究費補助金
(成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業 (健やか次世代育成総合研究事業))
「健やかな親子関係を確立するためのプログラムの開発と有効性の評価に
関する研究 (H29-健やか-一般-004)」 分担研究報告書

子どもの頃の家族関係が青年後期・成人期のメンタルヘルスに与える影響 —母子ペアデータによる検討—

研究協力者 水本深喜 (国立成育医療研究センターこころの診療部)

研究要旨 本研究は、子どもを健やかに育てることができる健やかな家族とはどのような家族なのか、そして家族での被養育体験が、子どもの成長後にどのような影響をもたらすのかについて、青年期後期の子とその母親への質問紙調査により得られたデータを分析することで、明らかにすることを目的とした。

【分析 1】「子どもを健やかに育てる家族尺度」の作成 専門学校生、大学生およびその母親を対象に H28 年度本班分担研究で作成した「子どもを健やかに育てる家族尺度」(母子の被養育体験、母親の養育体験を問う尺度。下位尺度は、「地域に開かれた家族」「子どもを支える家族」「子どもを傷つけない家族」)の信頼性・妥当性を実証した。

【分析 2】母親の被養育体験と養育体験の関連 「子どもを健やかに育てる家族尺度」を用い、母親自身の被養育体験と自身の養育体験との関連を分析した。その結果、両者には中程度から強い相関関係が認められた。両者の差を見ると、「地域に開かれた家族」では被養育体験の方が養育体験よりも有意に高かった。

【分析 3】子の被養育体験と母親の養育体験の関連 子の幼少期から学童期の家族について、子の被養育体験・母親の養育体験差を分析した。その結果、「子どもを支える家族」「地域に開かれた家族」では、弱い有意な親子間相関がみられたが、「子どもを傷つけない家族」には、親子間相関はみられなかった。母子間差を見ると、「子どもを支える家族」で、母親の認識よりも子の認識が高かった。

【分析 4】子のメンタルヘルス認知の母子間差および相関 ASEBA 尺度を用い、子のメンタルヘルス認知の母子間差および相関を調べた。その結果、「社交」以外では、総じて学生が認知する自らの行動問題よりも、母親の評価の方が有意に低かった。相関関係では、総じて中程度から弱い相関関係が認められたが、「侵入性」「その他の問題」には、母子間相関は見られなかった。

【分析 5】子どもの頃の家族関係が青年期から成人期の子のメンタルヘルスに与える影響 「地域に開かれた家族」→「子どもを支える家族」→「子どもを傷つけない家族」→「子の成長後のメンタルヘルス」という階層構造を持つ「子どもを健やかに育てる家族」モデルについて、母子双方の認知を含め、共分散構造分析で検証した。その結果、総じて母親が捉える養育態度よりも、子の被養育体験が、母子が捉える子のメンタルヘルスに影響を与えていた。特に、母

子が捉える規則違反的行動などの外向問題や思考の問題は、子どもが子どもの頃親に支えられていたと感ずることができ家族関係において抑制されることが示された。加えて、子が親に傷つけられていなかったと捉えている場合にも、親が捉える外向問題は抑制されると考えられた。一方、子が地域に開かれた家族で育ったと捉えていると、子が認知する不安抑うつなどの内向問題は抑制されていた。

【総合考察】 家族が地域とのつながりを持つことは、親が子どもを支える家族を形成することを促し、子どもを支えることができる家族の有り様を媒介して子どもを傷つけない子育てを促し、成長後の子のメンタルヘルスを高めると考えられた。親の認知よりも子が認知する被養育体験が、成長後の子のメンタルヘルスに対し、より影響を及ぼしていた。中でも、子が親に支えられていると認識できるように親が関わることは、子の問題行動を抑制すると期待される。また、親の認知ではなく、親から体罰や暴言を受けたという子の認知を重視する必要性が示唆される。

研究協力者

山縣然太郎 山梨大学大学院総合研究部社医学域基礎医学系会医学講座
松浦賢長 福岡県立大学看護学部 ヘルスプロモーション看護学系
山崎嘉久 あいち小児保健医療総合センター
尾島俊之 浜松医科大学医学部健康社会医学講座
市川香織 文京学院大学保健医療学部看護学科
篠原亮次 健康科学大学健康科学部
岩佐景一郎 山梨県福祉保健部健康増進課
秋山有佳 山梨大学大学院総合研究部社医学域基礎医学系会医学講座
傳田純子 長野県須坂看護専門学校
小泉典章 長野県精神保健福祉センター
中澤文子 長野県健康福祉部 保健・疾病対策課母子・歯科保健係
立花良之 国立成育医療研究センターこころの診療部
乳幼児メンタルヘルス診療科

A. 研究目的

本研究では、平成 27 年度に発表された「健やか親子 21 (第 2 次)」に基づいた母子保健行政施策に生かすため、子どもを健やかに育てることができる健やかな家族とはどのような家族なのか、そして家族での被養育体験が、子どもの成長後にどのような影響をもたらすのかを明らか

にする。子どもを健やかに育てるための指針および家族の有り様が子どもの精神的健康に与える影響を明確にすることは、親の子育てや、地域による子育て支援への指針に寄与すると考えられる。

子どもを健やかに育てる家族とは、どのような家族なのであろうか。本研究では、家族システム論、ソ

ーシャルキャピタル、アタッチメント、虐待防止の視点から家族関係を捉える。

まず、子どもを健やかに育てるためには、家族自体が健やかである必要がある。家族システム論では、家族システムの上位システムであるコミュニティとの間で情報や物資の授受がなされるシステムの開放性が高い家族は健康度が高いと捉えられる。こうした家族の開放性については、社会学では、ソーシャルキャピタルという概念から論じられ、地域社会との信頼関係を築き居心地の良さを感じ、地域とよく交流することは、その家族の健康に繋がるとされている[1]。こうしたことから、健康な家族の基盤として、地域との繋がりを取り上げる必要がある。

次に、家族内においては、子どもの頃に温かく育てられたと認識していると、成人前期のレジリエンス、学業成績は良好で、対人関係の問題は少ないが、子どもの頃に親が拒否的であったり過度に支配的であったと認識していたりする場合には、成人前期の対人関係の問題や臨床的問題の多さに繋がると指摘される[2]。また、母子役割逆転は無秩序型アタッチメントと関連すること[3]、親の受容性と統制度が高いと子が認識していると18歳の子の心理社会的発達が良好であることも指摘される[4]。こうしたことから、子どもを受容し、親が親役割を果たすことで子どもを支えることができる家族であることは、アタッチメントの視点からも、子どもを健やかに育てる家族として重要な要素であると言える。

一方、子どもの健やかな発達を阻

害することが指摘される養育として、虐待や体罰、子どもに対する暴言など、子どもを身体的・精神的に傷つける養育を取り上げる必要がある。しつけと称して子どもを傷つけることも、子どもの健全な発達を阻害する。親の体罰は、子どもの道徳内化の水準の低下、攻撃性の増大、非行・反社会的行動の増大、親子関係の悪化、メンタルヘルスの低下につながる[5]、厳しいしつけや虐待を受けた子どもは、18歳の非行、物質乱用、精神疾患、暴力被害者になる率が高いことが示されている[6]。こうしたことから、身体的・精神的に子どもを傷つけないことも、子どもを健やかに育てる家族の重要な一側面と言えよう。

本研究では、これらの3つの要因は、階層的構造を持つと想定する。すなわち、地域に開かれている家族の有り様は、子どもを支えていくことができる家族を育くみ、子どもを傷つけない家族であることを支え、子どもを支える家族は、子どもを傷つけない家族であることを支えるであろう。そして、これらの家族の有り様は、媒介的および直接的に成長後の子どものメンタルヘルスを高めると予測する。こうしたことから、本研究では、「子どもを健やかに育てる家族モデル」(Figure 1)を想定する。

こうした家族の有り様について、本研究では母親自身の被養育体験が自身の養育に影響を与えていると予測する。アタッチメント関係や虐待は世代間伝達することが指摘されるが、本研究で捉えた家族関係は、世代間伝達されているのであろうか。

これを明らかにするためには、母親自身の被養育体験、養育体験、子の被養育体験を聞く必要がある。

加えて、親の養育体験と子の被養育体験の間には差があると予測され、子のメンタルヘルス認知についても、母子間で差があるであろう。こうしたことから、子どもの頃の家族関係が子のメンタルヘルスに与える影響について明らかにするためには、母子双方が認知する家族関係および子のメンタルヘルスを聞く必要がある。親については、父母双方から回答を得ることが理想ではあるが、本研究では、多くの場合に育児の中心的担い手であり、子のメンタルヘルスにより影響があると考えられる母親を調査対象とする。

これらより、本研究では、「子どもを支える家族」、「子どもを傷つけない家族」、「地域に開かれた家族」という3つの側面から捉える家族関係について、母親と子どもの認知を測定することができる尺度を作成してその信頼性・妥当性を検証する(分析1)。次いで、母親の被養育体験と自身の養育との関連(分析2)、子の被養育体験と母親が認知する養育との関連(分析3)、子のメンタルヘルス認知の母子間関連(分析4)を明らかにした上で、子どもの頃に体験した家族関係が、高等学校を卒業し、家族との関係も自律的なものに移行しつつある時期以降の、青年期後期から成人期にある「子」の行動やメンタルヘルスにどのような影響を与えているのかについて、母と子の認知も考慮に入れて明らかにする(分析5)。

分析1 「子どもを健やかに育てる家族尺度」の作成

分析1では、「子どもを健やかに育てる家族尺度」の尺度項目と因子を確定し、尺度の信頼性を検証する。

信頼性は、1週間の間を置いた再検査法および α 係数の算出により実証する。

構成概念妥当性の検討に当たっては、変数として「家族機能」、「ソーシャルキャピタル」、「養育態度」を用いる。

家族の状態を測定する測度として、米国で最も注目されているのが、円環モデルに基づいて家族機能を評価するFACES3[7]である[8]。円環モデルでは、家族を「凝集性」「適応性」「コミュニケーション」の3つの次元から捉える。「凝集性」は、家族成員がお互いに持つ情緒的なつながりであり、「適応性」は、状況的危機や発達の危機に対して、家族システムの勢力構造や役割関係などを変化させる能力である。「コミュニケーション」は、「凝集性」「適応性」の両次元を促進させる働きを持つ。FACES3では、「凝集性」「適応性」の両次元が中程度のバランス群を家族機能が良く働く健康な家族としており、これらの変数と家族健康度は、カーブリニアな関係にあると想定している。しかし、「凝集性」と家族機能は、凝集性が高い程家族機能は良好であるというリニアな関係が数々の研究で指摘され[9-11]、我が国の研究においても同様の結果が見られている[12]。邦訳FACES3[12]の尺度項目を見ても、とくに「凝集性」に関しては健康な家族関係と捉えられるため、本研究では、「健やかな家

族関係尺度」の3つの下位尺度は、「凝集性」と正の相関を示すと予測する。一方、「適応性」に関しては、家族の柔軟性は非臨床群においては高いほど家族が機能していると想定し、これに関しても正の相関を予想する。

次に、「ソーシャルキャピタル」との関連については、地域との繋がりを示す「地域に開かれた家族」との正の相関を予測する。

最後に、親の「養育態度」は、「子どもを健やかに育てる」家族という意味で、本尺度と大きく関連するであろう。「肯定的否定的養育行動尺度」[13]では、Alabama Parenting Questionnaire や Parent Behavior Inventory といった、国際的に幅広く利用されている4つの代表的な養育行動尺度の因子構造や養育行動のメタ分析[14]の結果を踏まえて親の養育態度を包括的に捉え、「関与・見守り」「肯定的応答性」「意思の尊重」からなる「肯定的養育」と「過干渉」「非一貫性」「厳しい叱責・体罰」からなる「否定的養育」といった2側面の養育態度を同定した。「子どもを健やかに育てる家族尺度」の各下位尺度は、「肯定的養育」とは正の、「否定的養育」とは負の相関を示すと予測する。また、「子どもを傷つけない家族」については、否定的養育の中の「非一貫性」「厳しい叱責・体罰」と負の相関を示すと予測する。

分析2 母親の被養育体験と養育の里相関 母親自身の子どもの頃の被養育体験は、母親の養育態度に影響を与えると考えられる。そこで分析2では、母親自身が子どもの頃を想起して回答する「子どもを健や

かに育てる家族尺度」各下位尺度得点と、母親の養育の差と相関を明らかにする。

分析3 子の被養育体験と母親の養育認知の関連 親の養育に関するには、母子間でズレがあるであろう。そこで分析3では、子の認知による「子どもを健やかに育てる家族尺度」下位尺度得点と母親が認知する「子どもを健やかに育てる家族尺度」の差と相関を分析する。

分析4 子のメンタルヘルス認知の母子間差と相関 子のメンタルヘルスについても、母子間での認知にはズレが見られるであろう。分析4では、子が回答する自身の包括的な心理社会的適応度(ASR)と親が回答する子の心理社会的適応度(ABCL)の差と相関関係を分析する。

分析5 子どもの頃の家族関係が青年・成人のメンタルヘルスに与える影響

「子どもを健やかに育てる家族尺度」の下位尺度である「子どもを支える家族」「子どもを傷つけない家族」「地域に開かれた家族」という側面からみた子どもの頃に体験した家族関係が、現在のメンタルヘルスにどのような影響を与えているのかを検証する。本来なら、縦断研究により幼児期から児童期の子どもの頃の家族関係と、それらの子どもの成長後の精神的適応を測定するべきであるが、調査方法の限界より、青年・成人および母親が子どもの頃の家族関係を回顧した家族関係と現在の精

神的適応との関連を検討する。

まずは、「子どもを健やかに育てる家族尺度」で想定した「子どもを健やかに育てる家族モデル (Figure1)」について、家族の有り様の階層的構造を検討する。次いで、それらの家族関係が、子の現在の精神的適応にどのような影響を与えているのかを検証する。

メンタルヘルスとしては、まず、抑うつを含む包括的な心理社会的適応度を上げる。子どもの頃を回顧した「子どもを健やかに育てる家族尺度」下位尺度得点の高さは、現在の抑うつ度や不安の低さと関連すると予測する。

虐待や厳しいしつけを受けると、攻撃的行動や逸脱行動が増えることが指摘されていることから[6]、「子どもを傷つけない子育て」の高さは、外在化問題の低さと関連すると予測する。

B. 研究方法

分析 1 : 方法

2017年2月から10月に、首都圏の大学および長野県の専門学校において、質問紙調査を行った。質問紙は、授業中または授業の合間の時間に教室にて配布し、倫理的配慮の説明後、回答を求めた。再検査信頼性を実証するための調査対象者(77名)には、1週間後に回答を郵送していただくようお願いした。回答所要時間は、15分から25分であった。調査への協力者には、QUOカード500円分(再検査信頼性調査対象者には1,000円)が後日送付された。学生には、母親にも回答協力をお願いできる場合には質問紙を母親に渡し、

回答を郵送していただくようお願いした。母親にも、謝礼としてQUOカード500円分を送付した。

調査協力者 学生データとして、203名のデータが回収された(内、男性24名、女性179名)。年齢は24歳から44歳にわたり、平均年齢は20.52歳であった。母子ペアデータは、97ペア回収された。母親の年齢は40歳から58歳にわたり、平均年齢は49.14歳であった。

質問紙

学生向け質問紙

1. フェイスシート 項目は、「性別」「年齢」「学年」「子どもの頃に育った地域」「子どもの頃の家族構成」であった。

2. 子どもを健やかに育てる家族尺度(資料1)平成28年度厚生労働科学研究費補助金 健やか次世代育成総合研究事業「母子の健康改善のための母子保健情報利活用に関する研究」研究班(研究代表者 山縣然太郎)と「メンタルヘルス不調の妊産褥婦に対する医療・保健・福祉の具体的な連携と対応の整備、及び健やかな親子関係のための妊娠期からはじまる支援施策についての研究」研究班(研究代表者 立花良之)が協働し、子どもを健やかに育てる家族とはどのような家族なのかについてディスカッションを行った。研究班メンバーは、母子保健研究者であった。得られた子どもを健やかに育てる家族関係の各項目およびそれらをK-J法でまとめた結果(「地域社会と交流の多い親子」、「コミュニケーションが良好な親子」、「子どもの心を大切にする親」)を参考に、17項目からなる質問紙を作成した。教

示は、「子どもの頃のあなたの家族についてお答えください」であった。「そう思わない（1点）」「あまりそう思わない（2点）」「ややそう思う（3点）」「そう思う（4点）」の4件法である。

3. 子どもの頃とはどの時期かを問う項目 「子どもを健やかに育てる家族尺度」では、回答者が子どもの頃を想起して回答するよう求めるが、回答者のどの時期を想起するのかは、回答者によって異なるであろう。そこで、「前のページの質問で、『子どもの頃』と読んで、あなたはどの時期を思い浮かべましたか。当てはまるもの全てを○で囲んでください。」と教示して回答を求めた。選択肢は、「0～3歳頃」「3歳～6歳頃」「小学校1～3年」「小学校4～6年」「中学生」「高校生」「高校卒業後」であった。

妥当性検証のための尺度 1. FACES3[12]Olsonの円環モデルに基づいて家族関係を測定する尺度の日本語版である。「凝集性」「適応性」の2軸から、家族機能を捉える。5件法で、20項目からなる。**2. ソーシャルキャピタル尺度[15]**「社会的信頼」1項目（4件法）、「所属意識」3項目（7件法）からなる。英語版を邦訳した。**3. 認知的ソーシャルキャピタル尺度[16]**地域との信頼関係、所属意識、相互援助・相互交流意識など、認知的ソーシャルサポートを測定する尺度である。5件法で12項目からなる。**4. 肯定的・否定的養育態度尺度[13]**「関与見守り」「肯定的応答」「意思の尊重」の下位尺度からなる子ども中心の養育を示す「肯定的養育態度」、「過干渉」「非一貫性」

「厳しい叱責体罰」の下位尺度からなる親中心の養育を示す「否定的養育態度」から構成される。4件法で、35項目からなる。

尺度 1. PHQ9[17] Spitzerらが作成したPHQの中から大うつ病性障害モジュールの質問項目を抽出したものの日本語版である。DSM-5診断基準に沿ったうつ病の評価尺度で、4件法、9項目からなる。**2. 愛着スタイル尺度 ECR-GO[18]**愛着理論に基づき、Bartholomew & Horowitz[19]が作成した愛着スタイル尺度の日本語版である。助けを必要とするときでも他者に頼ることや近接することを回避する心性を示す「親密性の回避（愛着の自己モデル）」、必要とするときに他者から助けや受容が受けられるかについて不安を持つ心性を示す「見捨てられ不安（愛着の他者モデル）」の2側面から、一般的な他者との関係を捉える。7件法で、36項目からなる。

母親向け質問紙

1.フェイスシート

2.子どもを健やかに育てる家族尺度（被養育態度） 母親自身の子どもの頃の家族関係を問うために実施した。

3.子どもの頃とはどの時期かを問う項目 学生向けと同様のものを実施した。

4.子どもを健やかに育てる家族尺度（親の養育態度） 「困ったときは、親が助けてくれた」は「子どもが困ったときは、私が助けてあげた」など文言を変更し、母親が子どもをどのように養育したのかを聞いた。

5.PHQ9 母親のメンタルヘルスを問うために実施した。

分析 4

学生向け質問紙

1. ASEBA 行動チェックリスト成人用自己評価 (ASR) [20]Achenbach らが開発した心理社会的適応状態を包括的に評価するシステム (ASEBA : Achenbach System of Empirically Based Assessment) [21]に基づいて作成された、日本語版成人 (18 歳~59 歳) 用自己評価式行動チェックリストである。「不安・抑うつ」「引きこもり」「身体愁訴」「思考の問題」「注意の問題」「攻撃的行動」「規則違反的行動」「侵入性」の症状群およびその上位概念としての「外向尺度」「内向尺度」「全尺度」からなる。あてはまらない (0 点)、ややまたはときどきあてはまる (1 点)、たいへんまたはよくあてはまる (2 点) の 3 件法で、134 項目からなる。50 点を平均値とした T 得点が算出されるが、本研究での分析では他の尺度同様に本尺度得点を間隔尺度とみなし、分析においては、粗点平均値を使用した。

2. 母親向け質問紙

ASEBA 行動チェックリスト成人用他者評価 (ABCL) 上記 ASR の他者評価版を実施した。

C. 研究結果

分析 1 子どもを健やかに育てる家族尺度の作成 (母親データおよび学生データ)

「子どもを健やかに育てる家族尺度」の学生の被養育体験、母親の養育、母親の被養育体験データを合算して分析した。

項目の選別 回収されたデータについて、天井・床効果が見られた

項目が 17 項目中 11 項目であったが、いずれも重要な項目と考えられたので、ひとまず削除しなかった。

因子の確定 17 項目について、「子が捉える子どもの頃の家族」「親が捉える自信が子どもの頃の家族」

最尤法・プロマックス回転による因子分析を施した。因子負荷量が複数因子にまたがる項目を削除しながら因子分析を繰り返し、スクリープロットの形状から、3 因子が妥当と考えられ、最終的に 10 項目が採択された (Table1)。

第 1 因子は、「困ったときは親が助けてくれた」等の 4 項目からなり、親が子どもを受容し、コミュニケーションが取れ、親役割が果たされている関係において、子どもが親に精神的に支えられていた家族関係を示していると考えられるため、「子どもを支える家族」因子と命名した。第 2 因子は、「親によく叩かれた」等 3 項目からなり、子どもが親に身体的・精神的に傷つけられた体験を表していると考えられる。本尺度は子どもを健やかに育てる家族の有り方を示したいため、因子名を「子どもを傷つけない家族」とし、本因子の尺度得点については因子負荷量を逆転して算出することとした。第 3 因子は、「私の家族は、困ったときに近所の人と助け合っていた」等 3 項目からなり、家族が地域に開かれている関係を示していると考えられるため、「地域に開かれた家族」因子と命名した。各因子を下位尺度とした各尺度得点間の相関係数を (Table2) に示した。「子どもを支える家族」と「子どもを傷つけない家族」「地域に開かれた家族」との間には中程度の性の

相関がみられたが、「地域に開かれた家族」と「子どもを傷つけない家族」の間には相関は見られなかった。

因子的妥当性および α 係数による信頼性 下位尺度得点の因子的妥当性と α 係数による信頼性を分析した (Table3)。その結果、因子的妥当性、 α 係数は許容範囲の値を示した。

再検査法による各因子の信頼性の検討 再検査法の実施を目的として、第一回目の調査実施1週間後に第二回調査を実施した (N=77)。その結果、第一回調査施行時の得点と第二回調査施行時の得点との相関係数は、「子どもを支える家族」因子では $r=.89(p<.001)$ 、「子どもを傷つけない家族」因子では $r=.79(p<.001)$ 、「地域に開かれた家族」因子では $r=.73(p<.001)$ となり、高い再検査信頼性が実証された。

各因子の構成概念妥当性の検討 「子どもを健やかに育てる家族尺度」の各下位尺度得点と関連尺度得点との相関関係を (Table4) に示す。「子どもを支える家族」では、FACES3の「凝集性」とは強い正の、「適応性」とは中程度の正の相関が、「認知的ソーシャルキャピタル」とは弱い正の相関がみられた。「肯定的・否定的養育行動」の「肯定的養育」各因子とは中程度の正の相関、「否定的養育」の「非一貫性」とは中程度の負の相関がみられた。

「子どもを傷つけない家族」では、FACES3の両因子と弱い正の相関、「肯定的・否定的養育行動」の「肯定的養育」各因子と中程度から弱い正の相関、「否定的養育」の「非一貫性」とは中程度の負の相関、「厳しい

叱責体罰」とは中程度の負の相関がみられた。

「地域に開かれた家族」では、FACES3の両因子と中程度の正の相関、「認知的ソーシャルキャピタル」とやや強い正の相関、「ソーシャルキャピタル」の「社会的信頼」と中程度の、「地元帰属意識」と強い正の相関がみられた。「肯定的・否定的養育行動」の「肯定的養育」各因子とは中程度の正の相関、「否定的養育」の「非一貫性」とは中程度の負の相関がみられた。

本質問紙で回答者が想定した「子どもの頃」 本尺度の教示で用いた「子どもの頃」に関して、調査協力がどの時代を想起したのかを聞いた調査の結果 (複数回答可) について、各年代の選択・非選択の度数分布をカイ二乗検定で分析すると、双方には有意な関連が見られた (Tables5, 6)。学生データでは、小学1~3年、小学3~6年を想起したものが有意に多く、0~3歳、高校生、高校生以降を想起したものは有意に少なく (全て $p<.001$)、3~6歳、中学生想起選択の有無には有意差は見られなかった。一方、親データでは、小学1~3年、小学3~6年を想起したものが有意に多く、0~3歳、3~6歳、高校生、高校生以降を想起したものは有意に少なく (全て $p<.001$)、中学生想起選択の有無には有意差は見られなかった。

分析2 母親の被養育体験と養育の関連 (母親データ) 母親が回答した「子どもを健やかに育てる家族尺度」下位尺度得点の被養育体験と自身の養育の相関と差を検討した

(Table7)。その結果、両者には中程度から強い相関がみられた。T検定により両尺度の各下位尺度得点の差をみると、「地域に開かれた家族」のみで被養育体験の方が養育体験よりも高い傾向がみられた。「子どもを支える家族」「子どもを傷つけない家族」では、差はみられなかった。

分析 3 子の被養育体験と母親の養育認知の差と相関 (母子ペアデータ)

学生が回答した被養育体験と母親が回答した養育体験の、相関と差を検討した (Table 8)。その結果、「子どもを支える家族」「地域に開かれた家族」では、弱い有意な相関関係がみられたが、「子どもを傷つけない家族」では、母子間相関はみられなかった。t検定により、両尺度下位尺度得点の差をみると、「子どもを支える家族」では、子の被養育体験は母親の養育体験よりも高かった。「子どもを傷つけない家族」「地域に開かれた家族」では、差が見られなかった。

分析 4 子のメンタルヘルス認知の母子間差および相関 (母子ペアデータ)

ASEBAの他者評価版 (ABCL 母親が回答)、自己評価版 (ASR、学生が回答) による子のメンタルヘルス認知の相関関係を検討した (Table9)。その結果、両者には、総じて中程度から弱い有意な相関関係が示された。一方、「侵入性」「その他の問題」では、母子間相関はみられなかった。得点の母子間差をみると、総じて学生が捉える自身の行動問題得点は、母親が捉える子の行動問題得点よりも有意に高かった。「社交」のみにて、母子間差はみられなかった。

分析 5 「子どもを健やかに育てる家族モデル」-3 つの下位尺度が子どものメンタルヘルスに与える影響 まず、「子どもを健やかに育てる家族尺度」下位尺度である「子どもを支える家族」「子どもを傷つけない家族」「地域に開かれた家族」という家族の3つの側面について、母親の養育認知が子の被養育体験に影響をおよぼし、それぞれの家族関係の側面が階層構造をもつと想定し、それらが母子がとらえる子のメンタルヘルスに影響を与えるというモデルについて共分散構造分析を行った。次いで、有意なパスがみられなかった「地域に開かれた家族」から「子どもを傷つけない家族」へのパス、親が認知する「子どもを傷つけない家族」から子が認知する「子どもを傷つけない家族」へのパスを消したモデルを作成した (Table 10)。モデルの適合度は、 $\chi^2 = 7.479, p = .831, GFI = .979, AGFI = .917, CFI = 1.000, RMSEA = .000, AIC = 61.479$ と、高かった。これを、子供を健やかに育てる家族モデルとする (Figure2)。

母親が認知する養育体験が、成長後の子のメンタルヘルスに与える影響 母親が捉える「子どもを支える家族」尺度得点が高ければ、子が捉える自身の「外向問題」「侵入性」得点は低い傾向がみられた。母親がとらえる子のメンタルヘルスに与える影響はみられなかった。

子が認知する被養育体験が、成長後の子のメンタルヘルスに与える影響 子が捉える「地域に開かれた家族」尺度得点が高いと、母親が捉える子の「外向問題」「攻撃的行動」

「注意の問題」は有意に高く、「規則違反行動」高い傾向にあり、子が捉える「思考の問題」は有意に低く、「内向問題」「不安抑うつ」「引きこもり」は低い傾向がみられた。

子が捉える「子どもを支える家族」得点が高いと、母親が捉える子の「全尺度問題」「外向問題」「攻撃的行動」「規則違反的行動」「思考の問題」は有意に低く、「侵入性」得点は低い傾向を示した。子が捉える自身のメンタルヘルスとの関連では、「外向尺度」「攻撃的行動」「規則違反的行動」は有意に低く、「思考の問題」は低い傾向がみられた。

子が捉える「子どもを傷つけない家族」得点が高いと、母親が捉える子の「全問題」「攻撃的行動」「侵入性」「その他の問題」は有意に低く、「規則違反行動」には低い傾向がみられた。子が捉える自身のメンタルヘルスとの関連では、「侵入性」が低い傾向を示した。

D. 考察

分析 1 : 考察

分析 1 では、子どもを健やかに育てる家族の有り様を捉えるための尺度を作成した。尺度は、青年や成人が自らの子どもの頃の被養育体験をどのように捉えているか、親が自身の養育体験をどのように捉えているのかを測定するものである。質問紙調査の結果、「子どもを支える家族」「子どもを傷つけない家族」「地域に開かれた家族」の 3 因子 10 項目からなる「子どもを健やかに育てる家族尺度」が作成された。尺度の確定に当たって、探索的な因子分析を行った。信頼性は、 α 係数および再検

査法で確認した。妥当性は、家族構造、ソーシャルキャピタル、養育態度との関連から構成概念妥当性を確認した上で、学生の被養育体験、母親の被養育体験、養育体験別に因子妥当性を確認した。再検査信頼性は高い水準にあり、構成概念妥当性も実証された。学生の被養育体験、母親の被養育体験、養育体験別にみた α 係数、因子妥当性は、許容範囲から高い水準にあると考えられた。回答者は、「子どもの頃」として、3~6 歳の幼児期と児童期を主に回顧して回答していると考えられた。これらの検討により、子どもの頃の家族を「子どもを健やかに育てる家族」という側面から測定することができる「子どもを健やかに育てる家族尺度」の尺度項目を確定することができた。

分析 2 : 考察

分析 2 においては、母親が子どもの頃の被養育体験と母親の養育体験との関連を検討した。その結果、両者には強い相関関係がみられた。このことから、母親が子どもの頃にどのように育てられたのかに関する認知は、母親の子育てに強く関連していることがわかる。一方、「地域に開かれた家族」では、母親の被養育体験よりも母親の養育体験の方が低い傾向にあり、母親は、地縁の希薄化を認知していることが示された。

分析 3 : 考察

学生が子どもの頃の被養育体験と母親の養育体験の関連を検討した。相関関係では、「子どもを支える家族」と「地域に開かれた家族」との間に

は弱い相関がみられた一方で、「子どもを傷つけない家族」には、有意な相関が見られなかった。こうしたことから、虐待に関連するような親から子への暴言・暴力は、親子間での認知が異なることが示唆される。

分析 4：考察

ASEBA による子のメンタルヘルスについて、子の評定・母親の評定間の相関を調べると、総じて中程度から弱い母子間相関が認められた。外向問題を示す尺度および注意の問題では母子間相関が低いか無相関であり、こうした発達障害とも関連するメンタルヘルス評価においては、母子いずれの評価であるのかについて、注意が必要であると考えられる。

分析 5：考察

母子の「子どもを健やかに育てる家族尺度」による家族認知を説明変数にした「子どもを健やかに育てる家族モデル」を用い、子どもの頃の家族関係が成長後の子のメンタルヘルスに与える影響を検討した。「子どもを健やかに育てる家族モデル」は階層構造を持ち、「地域に開かれた家族」は関係性の基盤として働いていると考えられた。

総じて母親が捉える養育態度よりも、子の被養育体験が、母子が捉える子のメンタルヘルスに影響を与えていた。特に、母子が捉える規則違反的行動などの外向問題や思考の問題は、子どもが子どもの頃親に支えられていたと感ずることができ家族関係において抑制されることが示された。加えて、子が親に傷つけ

られていなかったと捉えている場合にも、親が捉える外向問題は抑制されると考えられた。子が捉える外向問題には影響関係がみられなかったのは、外向問題を問題として捉えるにあたり、母親の評価の方が妥当であると考えられるからなのではないだろうか。一方、子が地域に開かれた家族で育ったと捉えていると、子が認知する不安抑うつなどの内向問題は抑制されていた。母親が認知する内向問題への影響がみられなかったのは、母親は子の内向問題に気づきにくいためであると考えられる。

総合考察

子どもの頃の「子どもを支える家族」「子どもを傷つけない家族」「地域に開かれた家族」の3つの側面から捉えた「子どもを健やかに育てる家族」は、青年後期・成人期の子のメンタルヘルスに影響を与えていた。家族が地域とのつながりを持つことは、親が子どもを支える家族を形成することを促し、そうした家族の有り様を媒介して子どもを傷つけない子育てを促して、成長後の子のメンタルヘルスを高めると考えられた。特に、子が母親から支えられていたと認知していると、子の外向問題は抑制されることは顕著に示された。

虐待と関連するような、親から子への暴言・暴力の程度は、極端で明確な育児態度であり、母子間相関は有意に出るよう予測された。しかし、親から子への暴力・暴言について、子どもを傷つけない家族のみで母親から子へのパスが引けなかったことは、親が子を傷つけているつも

りはなくとも子が傷ついている場合があり、またその逆もあるということを示している。そして、母親ではなく子が、子どもの頃親から傷つけられなかったと捉えていることが、親が捉える子の外向問題を抑制していたことから、親の認知に関わらず、子が親から体罰や暴言・暴力を受けたと認知している場合には、その認知を重視する必要性を示唆している。

引用文献・出典

1. Kawachi, I., S.V. Subramanian, and D. Kim, *Social capital and health*, in *Social capital and health*. 2008, Springer. p. 1-26.
2. Baker, C.N. and M. Hoerger, *Parental child-rearing strategies influence self-regulation, socio-emotional adjustment, and psychopathology in early adulthood: Evidence from a retrospective cohort study*. *Personality and individual differences*, 2012. **52**(7): p. 800-805.
3. Macfie, J., et al., *Independent influences upon mother-toddler role reversal: infant-mother attachment disorganization and role reversal in mother's childhood*. *Attachment & Human Development*, 2008. **10**(1): p. 29-39.
4. Steinberg, L., et al., *Impact of parenting practices on adolescent achievement: Authoritative parenting, school involvement, and encouragement to succeed*. *Child development*, 1992. **63**(5): p. 1266-1281.
5. Gershoff, E.T., *Corporal punishment by parents and associated child behaviors and experiences: a meta-analytic and theoretical review*. *Psychological bulletin*, 2002. **128**(4): p. 539.
6. Fergusson, D.M. and M.T. Lynskey, *Physical punishment/maltreatment during childhood and adjustment in young adulthood*. *Child abuse & neglect*, 1997. **21**(7): p. 617-630.
7. Olson, D.H., *Family inventories: Inventories used in a national survey of families across the family life cycle*. 1992: Family Social Science, University of Minnesota.
8. Touliatos, J., B.F. Perlmutter, and M.A. Straus, *Handbook of family measurement techniques: Abstracts*. Vol. 1. 2001: Sage.
9. Miller, I.W., et al., *The McMaster family assessment*

- device: reliability and validity.* Journal of Marital and Family Therapy, 1985. 11(4): p. 345-356.
10. Green, R.G., et al., *Evaluating FACES III and the Circumplex Model: 2, 440 families.* Family Process, 1991. 30(1): p. 55-73.
 11. Green, R.G., et al., *The wives data and FACES IV: Making things appear simple.* Family Process, 1991. 30(1): p. 79-83.
 12. 草田寿子, 日本語版 FACES3 の信頼性と妥当性の検討. カウンセリング研究, 1995. 28(2): p. p154-162.
 13. 伊藤大幸, et al., 肯定的・否定的養育行動尺度の開発: 因子構造および構成概念妥当性の検証. 発達心理学研究, 2014. 25(3): p. 221-231.
 14. Kawabata, Y., et al., *Maternal and paternal parenting styles associated with relational aggression in children and adolescents: A conceptual analysis and meta-analytic review.* Developmental Review, 2011. 31(4): p. 240-278.
 15. Fujiwara, T. and I. Kawachi, *Social capital and health: a study of adult twins in the US.* American journal of preventive medicine, 2008. 35(2): p. 139-144.
 16. Fujiwara, T., et al., *Does Caregiver's Social Bonding Enhance the Health of their Children?: The Association between Social Capital and Child Behaviors.* Acta Medica Okayama, 2012. 66(4): p. 343-350.
 17. 村松公美子, *Patient Health Questionnaire (PHQ-9, PHQ-15) 日本語版および Generalized Anxiety Disorder-7 日本語版: up to date.* 新潟青陵大学大学院臨床心理学研究, 2014(7): p. 35-39.
 18. 中尾達馬 and 加藤和生, “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討. 九州大学心理学研究, 2004. 5: p. 19-27.
 19. Bartholomew, K. and L.M. Horowitz, *Attachment styles among young adults: a test of a four-category model.* Journal of personality and social psychology, 1991. 61(2): p. 226.
 20. 船曳康子 and 村井俊哉, *ASEBA 行動チェックリスト (18~59 歳成人用) の標準値作成の試み.* 臨床精神医学, 2015. 44(8): p. 1135-1141.
 21. Achenbach, T.M., P.A. Newhouse, and L. Rescorla, *Manual for the ASEBA older adult forms and profiles.* 2004: ASEBA.

E. 結論

本研究は、母子ペアデータを用い、子どもを健やかに育てることができる健やかな家族とはどのような家族なのか、そして家族での被養育体験が、子どもの成長後にどのような影響をもたらすのかを明らかにすることを目的とした。

まず、母親と成長後の子が「子どもを支える家族」「子どもを傷つけない家族」「地域に開かれた家族」の3つの側面から子どもの頃の家族関係を捉える「子どもを健やかに育てる家族尺度」の信頼性・妥当性を実証した。

そして、これら家族関係の3つの側面には、「地域に開かれた家族」が「子どもを支える家族」に影響を与え、「子どもを支える家族」が「子どもを傷つけない家族」に影響を与えるという階層構造があり、こうした階層構造を持つ母子がとらえる家族関係が子のメンタルヘルスに影響を与えるという、「子どもを健やかに育てる家族モデル」を作成し、子どもの頃の家族の有り様が、青年後期・成人期の子のメンタルヘルスに様々な影響を与えていることを明らかにした。

「子どもを健やかに育てる家族モデル」の適合度は高かったものの、本研究の結果には、子どもの頃の回顧法という研究方法の問題があり、重決定係数は高いとは言えなかった。しかし、子どもの頃を振り返って捉えた家族関係が現在のメンタルヘルスに与える影響としては、看過できない大きさであると考えられる。本研究の結果は、限られたサンプルに対する調査に基づくものであるため、結果の一般化には注意を要する。今後、より多様なサンプルへの調査が必要である。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表
なし
2. 学会発表
なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし

資料 1

Table1 子どもを健やかに育てる家族尺度の因子分析（学生データ，プロマックス回転，最尤法）

	1	2	3
子どもを支える家族			
X3親は私のことを信じてくれた	0.82	-0.02	0.02
X5困ったときは、親が助けてくれた	0.81	0.14	-0.01
X1親は私の意思を大事にしてくれた	0.72	-0.09	0.01
X11私の親は、親としての責任をしっかりと果たしていた	0.61	-0.05	0.01
子どもを傷つけない家族			
X4親によくたたかれた	-0.01	0.92	0.05
X8親によく怒鳴られた	0.04	0.77	-0.06
X16親はしつけのために私をたたくことはなかった	0.01	-0.74	-0.01
地域に開かれた家族			
X6私の家族は、困った時によく近所の人と助け合っていた	-0.03	0.06	0.82
X14私の家族は、他の人との交流が少なかった	-0.04	0.13	-0.62
X2私の家族は地域の活動祭り防災訓練等に積極的に関わっていた	0.02	0.05	0.59
	1	-0.36	0.44
	2		-0.02

Table2 「子どもを健やかに育てる家族尺度」下位尺度得点間の相関係数

	I 子どもを支える家族	II 子どもを傷つけない家族	III 地域に開かれた家族
I	—	0.308 ^{***}	0.360 ^{***}
II		—	0.021

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

資料 2

Table3 「健やかな家族関係」尺度下位尺度の妥当性（関連尺度との相関係数）

	地域に開かれた家族	子どもを支える家族	子どもを傷つけない家族
FACESIII			
凝集性	0.39 ***	0.53 ***	0.18 *
適応性	0.40 ***	0.42 ***	0.21 **
認知的ソーシャルキャピタル	0.68 ***	0.31 ***	0.01
ソーシャルキャピタル			
社会的信頼	0.40 ***	0.12	0.01
地元帰属意識	0.65 ***	0.31 ***	-0.01
肯定的・否定的養育態度			
肯定的養育態度			
関与見守り	0.29 ***	0.51 ***	0.09
肯定的応答	0.23 **	0.59 ***	0.25 ***
意思の尊重	0.40 ***	0.62 ***	0.36 ***
否定的養育態度			
過干渉	-0.25 ***	-0.30 ***	-0.29 ***
非一貫性	-0.29 ***	-0.50 ***	-0.39 ***
厳しい叱責体罰	-0.22 **	-0.40 ***	-0.60 ***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

資料 3

Table4 「子どもを健やかに育てる家族」各尺度の適合度指標および α 係数

回答者		質問内容	
学生	子どもの頃の被養育体験		
	適合度指標		$\chi^2=45.398$ $p=.059$ GFI=.958 AGFI=.928 CFI=.982 RMSEA=.046 AIC=91.398
	α 係数		
	子どもを支える家族	0.83	
	子どもを傷つけない家族	0.84	
	地域に開かれた家族	0.71	
母親	子どもの頃の被養育体験		
	適合度指標		$\chi^2=53.325$ $p=.01$ GFI=.902 AGFI=.832 CFI=.949 RMSEA=.089 AIC=99.325
	α 係数		
	子どもを支える家族	0.86	
	子どもを傷つけない家族	0.86	
	地域に開かれた家族	0.73	
母親	子が子どもの頃の養育		
	適合度指標		$\chi^2=32.930$ $p=.421$ GFI=.933 AGFI=.885 CFI=.996 RMSEA=.017 AIC=78.930
	α 係数		
	子どもを支える家族	0.73	
	子どもを傷つけない家族	0.77	
	地域に開かれた家族	0.65	

資料 4

Table5 「子どもの頃とは？」に対して想起した年代分布(学生データ)

	0-3歳頃	3歳-6歳頃	小学校1-3年	小学校4-6年	中学生	高校生	高校卒業後	
選択	度数	40 ***	77	129 ***	124 ***	72	25 ***	7 ***
非選択	度数	119 ***	82	30 ***	35 ***	87	134 ***	152 ***
計		159	159	159	159	159	159	159

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table6 「子どもの頃とは？」に対して想起した年代分布(親データ)

	0-3歳頃	3歳-6歳頃	小学校1-3年	小学校4-6年	中学生	高校生	高校卒業後	
選択	度数	11 ***	33 ***	75 ***	83 ***	48	26 ***	6 ***
非選択	度数	86 ***	64 ***	22 ***	14 ***	49	71 ***	91 ***
計		97	97	97	97	97	97	97

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table7 「子どもを健やかに育てる家族」母親の被養育体験と養育の平均値(標準偏差)と相関

	母親の被養育体験	母親の養育	t	相関係数
子どもを支える家族	3.35 (0.83)	3.37 (0.77)	-0.56	0.84 ***
子どもを傷つけない家族	2.93 (0.99)	3.00 (0.89)	-1.63	0.79 ***
地域に開かれた家族	3.18 (0.77)	3.10 (0.75)	1.89 †	0.67 ***

† $p < .1$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table8 子の被養育体験と母親の養育の平均値(標準偏差)と相関

	子の被養育体験	母親の養育	t	相関係数
子どもを支える家族	3.55 (0.55)	3.30 (0.70)	3.14 **	.28 **
子どもを傷つけない家族	2.98 (0.88)	2.89 (0.89)	0.69	.16
地域に開かれた家族	2.71 (0.77)	2.71 (0.45)	0.01	.24 *

† $p < .1$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

資料 5

Table9 子のメンタルヘルス (ASEBA行動チェックリスト) 認知の親子間差・相関

	ASR (子の認知)	ABCL (母親の認知)	t値	相関係数
全問題尺度	0.48 (0.26)	0.27 (0.21)	6.88 *	.28 *
内向尺度	0.53 (0.29)	0.28 (0.25)	7.74 ***	.39 ***
不安抑うつ	0.71 (0.40)	0.34 (0.28)	8.31 **	.33 **
引きこもり	0.55 (0.39)	0.35 (0.39)	4.37 *	.36 ***
身体愁訴	0.27 (0.33)	0.15 (0.24)	3.42 *	.38 ***
外向尺度	0.39 (0.29)	0.25 (0.21)	4.24 **	.29 **
攻撃的行動	0.43 (0.31)	0.25 (0.25)	4.70 *	.27 *
規則違反的行動	0.26 (0.31)	0.14 (0.21)	3.37 **	.37 ***
侵入性	0.53 (0.43)	0.41 (0.29)	2.08	.08
思考の問題	0.24 (0.25)	0.19 (0.25)	1.62 **	.31 **
注意の問題	0.65 (0.40)	0.39 (0.22)	5.59	.14
社交	1.07 (0.34)	0.57 (0.23)	11.69	.09
その他の問題	0.51 (0.28)	0.23 (0.23)	7.86	.15

資料 6

Table10 「子どもを健やかに育てる家族モデル」 回帰係数

	親の養育			子の被養育体験			R ²
	地域に開かれた家族	子どもを支える家族	子どもを傷つけない家族	地域に開かれた家族	子どもを支える家族	子どもを傷つけない家族	
	β	β	β	β	β	β	
ABCL (母親が認知する子のメンタルヘルス)							
全問題尺度	.028	-.083	-.068	.101	-.224 *	-.208 *	.131
内向尺度	-.006	-.052	-.068	-.034	-.137	-.152	.071
不安抑うつ	.054	.055	-.144	-.080	-.168	-.017	.100
引きこもり	-.032	-.162	.007	-.066	-.068	-.092	.058
身体愁訴	-.036	-.096	-.092	.119	-.069	-.087	.052
外向尺度	.036	-.044	-.088	.230 *	-.370 ***	-.229 *	.024
攻撃的行動	.003	.002	-.121	.229 *	-.338 **	-.205 *	.231
規則違反的行動	.045	-.016	-.001	.200 †	-.334 **	-.167 †	.186
侵入性	.107	-.043	-.064	.157	-.202 †	-.235 *	.114
思考の問題	.031	-.103	-.022	.223 *	-.326 **	-.122	.163
注意の問題	.051	-.051	.013	.030	-.057	-.041	.042
社交	.075	-.019	.093	.013	.148	-.119	.064
その他の問題	.014	-.085	-.109	.048	-.117	-.265 *	.127
ASR (子が認知する自身のメンタルヘルス)							
全問題尺度	.015	-.173	.076	-.148	-.159	-.097	.119
内向尺度	-.057	-.129	.093	-.203 †	-.086	-.153	.130
不安抑うつ	-.017	-.134	.089	-.208 †	-.024	-.141	.098
引きこもり	-.002	-.175	.182	-.201 †	-.047	-.057	.101
身体愁訴	-.107	.070	-.080	-.407	-.155	-.119	.073
外向尺度	.021	-.207 †	.027	.035	-.249 *	-.042	.123
攻撃的行動	-.022	-.177	.018	.018	-.231 *	-.045	.109
規則違反的行動	.117	-.158	.015	.062	-.330 **	-.033	.148
侵入性	.045	-.212 †	.045	.010	-.044	-.025	.054
思考の問題	.078	-.121	.086	-.038	-.195 †	-.204 †	.123
注意の問題	.096	-.128	.053	-.224 *	-.101	.089	.089
社交	.069	.081	.079	.065	.097	.002	.054
その他の問題	.018	-.131	.073	-.167	-.073	-.139	.087
PHQ	.018	-.036	-.074	-.068	-.126	-.074	.036

† $p < .1$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

資料 7

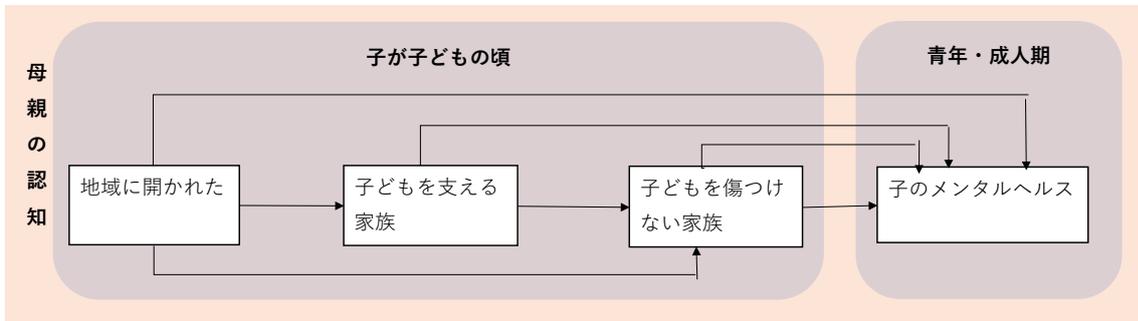
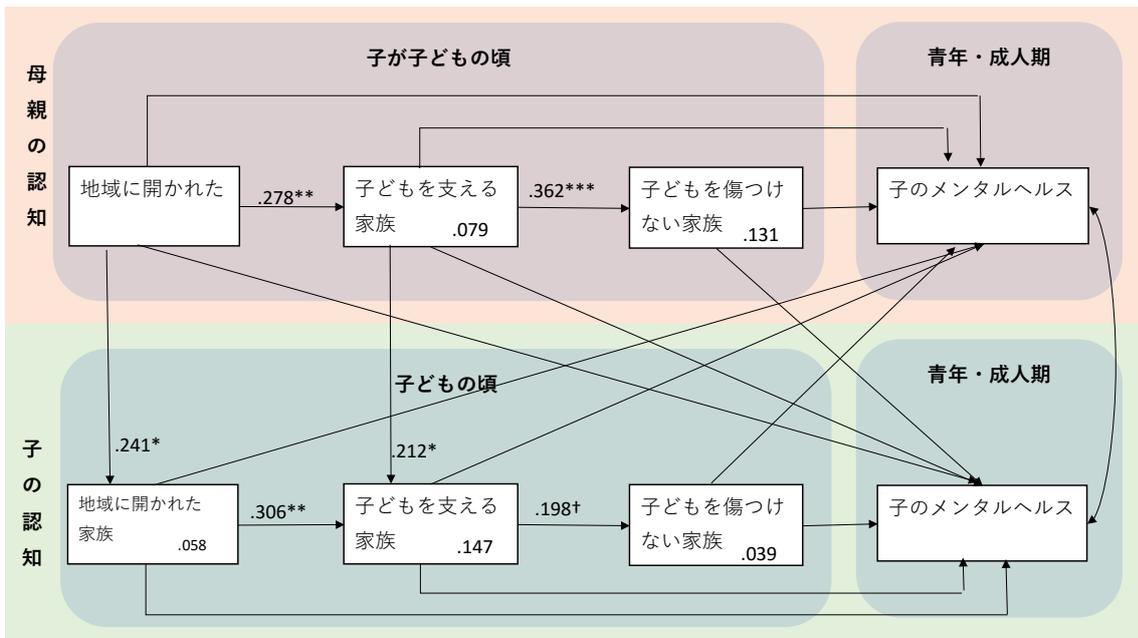


Figure1 本研究で想定する子どもを健やかに育てる家族モデル



$\chi^2=7.479$ $p=.831$ $GFI=.979$ $AGFI=.917$ $CFI=1.000$ $RMSEA=.000$ $AIC=61.479$

Figure2 子どもを健やかに育てる家族モデル